

プロローグ

「はじめまして、わたしはオルレアン帝国の皇女のフローラです。えっと……あのね、わたしと結婚してくれる？」

銀髪碧眼の繊細そうな美少女が、俺にプロポーズの言葉を投げかけた。

もし、日本で外国の美少女とお付き合いをしていて、結婚をせがまれたのなら、嬉しくもあつたと思う。

だけど、オルレアン帝国なんて聞いたことがない。

それに、なぜ、俺のような普通のサラリーマンが、皇女様と対面しているのか。

まるで西洋風の城のような広い空間だ。赤い絨毯と、飾り物の甲冑^{かっちゅう}。

そして、俺とフローラという少女は豪華なテーブルをさみ、向かい合って座っていた。

しかも、二人きり。

状況がまったく呑み込めなかった。

俺は二階院^{にかいゐん}一樹^{かずき}という名前の普通の日本人だ。社会人四年目の二十六歳。

その日も、俺は深夜までオフィスで働いて、会社を出たはずだ。

ちなみにうちの会社は、給料は悪くないが、月に一〇〇時間超えの残業を平気で行わせるブラック企業だった……。

帰りがけに煮干しラーメンを食べることだけを楽しみに、駅前の大通りに出て――。
そうだ。

そこで、俺は大型トラックに撥^はねられたはずだ。

なら、なぜ俺は生きているんだろう？

俺は目の前の少女を見つめた。青い瞳が俺を見つめ返す。

純白のドレスがとてもよく似合っていて、本当にお姫様のようだ。

いや、皇女と名乗っているのだから、本当にお姫様なのかもしれないけれど。

すらりとした美少女だけど、スタイル抜群で、大胆に開いたドレスの胸元から、その胸の大きさが見て取れる。

ドレスのスカートのスリットからは、白く細い魅力的な脚がちらりと顔をのぞかせていた。

俺は思わず目が釘付けになりそうになり、邪念を振り払う。

「えーと、ここはどこですか？」

俺の間拔けな問いに、皇女フローラは柔らかに微笑む。銀色の長い髪がふわりと揺れた。思わず、俺はその美しい表情に見とれた。まるで女神のようだ。

「戸惑うのも当然だよ。二階院一樹さん。ここは、あなたにとっては異世界なの」

「異世界？ 地球や日本とはまったく別の世界ということですか」

「あなたがいた世界が、地球や日本というなら、そのとおり。まったく別の世界、別の大陸の国だよ」

そして、フローラは、オルレアン帝国が大陸西方に位置する大国であること、そして、自分が先代の皇帝の長女であることを告げた。

「あなたを呼び出したのは、わたしが使った召喚の魔法なの」

「ええと……」

すぐには信じられない。俺が戸惑っているとフローラは、くすつと笑った。

フローラは立ち上がり、ドレスの裾が翻った。そして、指をパチンと鳴らす。

すると、青い光とともに、小さな白い毛むくじやらの生き物が現れた。

日本では見たことのない生き物だ。プードルに翼が生えたような、愛らしい見た目をしている。

「今のわたしの召喚魔法。信じてくれた？」

「手品ではなさそうですね」

「まだ疑っているんだ？」

俺の言葉に、フローラは頬を膨らませた。

第一印象よりも、子供っぽい表情が目立つ気がする。でも可愛い。

フローラは魔法の杖のような木の棒を取り出す。

そして、一振りする。

すると、窓の外がピカッと光り、爆音が響いた。

俺がびっくりしていると、フローラはいたずらつ子のように笑う。

「今のも魔法だよ。雷を生み出す系統のね。あつ、窓の外は誰もいない中庭だから、心配しないで」

そう言われても、気になったので、俺は窓の外に目を向けてしまふ。そこには……巨大な城があった。

正確には、今俺がいる場所も含めて、巨大な城が広がっている。

どうやら、魔法が存在することも、ここが異世界であることも認めないといけないようだ。

だが、どうして俺が呼び出されたのか？

俺の問いにフローラは顔を赤くした。

「最初に言ったでしょう？ 異世界人のあなたには……わたしと結婚して……そ、その……わたしとたくさん子供を作ってほしいの」

目の前の美少女は——皇女様は、俺と結婚してほしいと恥じらいながら言った。

しかも、子作りまでしてほしい、なんて言っている。

もちろん、こんな可愛い女の子とそういうことができるなんて聞いて、喜ばない男はいない。

けれど、あまりに話が飛躍している。

なにか合理的な理由があるはずだ。

俺は微笑んだ。

「どうして俺なんかと結婚するんですか？ 俺は向こうの世界では、ただの庶民でした。皇女殿下と釣り合うような身分ではありません」

「うん。それは、違うの。この世界では魔法を使うための魔力の量が身分を決めるの。異世界の人は、わたしたちこの世界の人間よりも、ずっと多くの魔力があるから……」

「そうすると、私も貴族と同じ扱いを受けられるということですか？」

「試しに俺は聞いてみた。この世界に貴族がいるのかはわからないが、見たところ、中世風の異世界だし、いてもおかしくない。」

実際、フローラは貴族が存在すると答えた。

けれど、俺が貴族扱いされることはないともフローラは言う。

「だって、あなたには、皇帝になつてもらうから」

「こ、皇帝……!？」

さすがに俺はびっくりして、椅子から転げ落ちそうになった。

どこの馬の骨ともわからない異世界人を呼び出して、皇帝にする。

そんな帝国があるだろうか？

フローラは俺の内心の動揺を見透かしたように、くすつと笑う。

「理由は三つあるの。一つ目は先代の皇帝、つまりわたしのお父様は、娘しか子供がいなかった、戦争で死んじゃったから、後継者がいないの」

「それなら——」

フローラ自身が帝位につけばいいのでは？ と俺は言いかけ、名前を呼んでも許されるのか、ためらってしまう。

フローラはそのことに気づいたのか、明るい笑みを浮かべた。

「フローラって呼んでくれていいよ」

「ありがとうございます。フローラさん自身が皇帝になるわけにはいかないのですか？」

「この国はね、男性優位の社会なの。女のわたしや、妹たちでは、皇帝になれる。だから、わたしと結婚して、あなたに皇帝になつてほしいの」

「でも、他に貴族とか、他国の王子とか、ふさわしい人間がいるのではないのでしょうか？」

「それはダメなの」

フローラは、ふふつと笑った。なんだか、試されているような気がする。

どうしてフローラが、他の男と結婚できないか、俺にもわかるはずだ。そうフローラは言いたそうだった。

俺は少し考えてから言う。

「貴族や他国の王子だと権力を握られることになるからですね？」

「正解。大貴族がわたしと結婚したら、強い権力を握りすぎて、他の貴族と内乱を起こしちゃう」

「そして、他の国の王子を迎えたら、オルレアン帝国はその国に従わないといけなくなる、ということです」

フローラは朗らかにうなずいた。この少女は、無邪気に見えて、いろいろ考えているようだ。実力ある人間を皇帝とすれば、問題が起きる。

だから、何の後ろ盾もしがらみもない異世界人の俺を選んだ。
納得できる理由だ。

フローラは指を立てて、「二つ目」とささやいた。

「この世界の人間は、魔力量をとてにも気にするの。だから、皇帝になるのは魔力量の多い人間でないといけない」

「ああ、だから、魔力量の多い俺が皇帝になるのは、都合が良いわけですね」

「それだけじゃないよ。未来の皇帝……つまり、わたしの血を引く子供も、魔力量がたくさんないといけないから……」

フローラは、青い瞳でちらりと俺を見る。そして、顔を赤らめた。

ああ、そういうことか。

それで、フローラは俺に子作りをしてほしいなんて、言ったわけだ。

魔力量が身分制の基礎となっていて、皇族や貴族が多く魔力量を持っているなら、それは遺伝するのだろう。

それなら、フローラは、魔力量の多い異世界人の俺の子を^{はち}孕めば、次代の子も多くの魔力量を獲得できる。

皇帝家は安泰というわけだ。

「でも、好きでもない相手と結婚して良いのですか？」

「皇女には……恋愛結婚の自由なんてないから」

フローラは寂しそうに、そう言った。

ここは日本ではない。中世風の社会だ。

そして、その中でも、フローラは皇女だ。結婚の自由なんてあるわけがない。

それでも、俺なんかと結婚していいのか、と思わなくもない。

フローラはたぶん十代後半の少女で、俺は二十代半ばだから、歳も少し離れているし……。

そんなことを考えていたら、立つたままのフローラがいたずらつぽく青い瞳を輝かせた。そして、座っている俺に近づき、上から覗き込んだ。

ドレスの胸の谷間がちょうど正面に来る位置になり、俺はどきどきする。

幼い顔立ちに比べて、身体はもう十分に大人というか、かなりグラマスだった。

「三つ目の理由なんだけどね。わたし、あなたみたいなタイプの人、けっこう好きなの」
「え？」

「黒髪黒目の人って、この大陸ではほとんどいないから、みんな憧れているんだ。それに、がつしりした身体つきも、優しそうな雰囲気も、気に入ったの」

フローラは冗談めかして、そんなことを言う。

どこまで本気なのだろうか？

フローラは俺の頬に手を当てた。びくつと震える俺に、フローラは「可愛い反応」と楽しそうにつぶやいた。

「貴族の男たちは、皇女のわたしでも見下している。わたしが……女の子だから。でも、あな

たからは、全然そんな雰囲気を感じなかった」

たしかに、俺は中世ではなく現代日本にいた。女性を露骨に見下したりもしないし、女性に優しくするのも当たり前だ。

でも、この世界ではそうではないのかもしれない。

フローラは窓の外に目を移す。そこには広大な庭園と、城があった。

「この国は戦争で無茶苦茶になっちゃった。農業も商業もダメになつて、貴族たちはみんな帝国の言うことを聞かない。戦争で男の人がたくさん死んじゃったから、女性はみんな結婚相手に困っているし、新しい子供も増えない」

「大変な状況なんですね」

聞いた限りだと、帝国といえども、その国力はかなり弱いものようだった。

フローラは、二十代半ばで、そんな国の皇族として国を率いる立場になつたわけで、その苦勞は計り知れない。

フローラは、俺を振り向いた。窓の外からの風で、銀色の髪がふわりと揺れる。

「二階院一樹さん。あなたは向こうの世界で死に、わたしに召喚されたの。身勝手なお願いだつてわかっている。でも……わたしと結婚して、皇帝になつてほしいな」

そして、フローラは頬を赤くしながら、片手でドレスの肩の布地をずらした。

肩が露わとなり、もともとはだけていた胸元がさらに広がる。

そして、胸を強調するように、俺にしなだれかかる。柔らかく大きな感触に、俺はどきりと

する。

「わ、わたしには他の選択肢がないの。わたしの初めてをもらつて、わたしを妊娠させて」

「で、でも、俺……私には皇帝になる資質なんてありません」

「政治はわたしが全部やるから大丈夫。あなたがしないといけないのは、わたしと側室の女の子との子作りだけだから」

「え？」

「だから、後宮でいくらでものおんぶりだらだらしてもらつてもいいんだよ？」

フローラは俺の耳元で、甘くささやいた。

俺は——決断を迫られた。

突然、異世界に呼び出され、美少女皇女に結婚を迫られる。

しかも、俺のやらないといけないことは、子作り以外は何もないらしい。

もともと強い権力を握られると困るという話だから、何もする必要がないというより、何もしない人が望ましいのだと思うが。

「もし俺がこの結婚を断つたら、どうなります？」

「そのときは元の世界に帰してあげる……と言いたいところだけど」

フローラは首をかしげ、ふわりと銀色の長い髪が肩に垂れかかる。

そもそも俺は死んだはずだ。

トラックに撥ねられて以降の記憶はないが、あれで生きているとは思えない。

「異世界人の召喚魔法は、異世界から命を失いかけている人を呼び出すの。魔力量の大きい人間は、召喚するのにも大きな魔力がいるんだけど……」

「死にかけているあいだは、魔力が弱まるんですか？」

「うん。それでも、何度も使えるような魔法じゃないよ。大変なの」

どのくらい大変かピンと来ないが、そんなにホイホイと連れてこられるようなものでもないということだと思う。

「でも、俺はかなりの大怪我……というか死んでいてもおかしくなかったはずですが……」

身体はピンピンしている。どこも痛いところすらない。

「異世界から召喚される際に、身体が霊的な何かで入れ替わるみたい。だから、事故に遭ってても平気なの」

「そ、それは怖いですね……」

「魔法だもの。でも、こっちの世界では健康だから、わたしを問題なく妊娠させられるよ」

ふふつとフローラは笑うが、少し恥ずかしそうに頬を赤くしている。

俺がフローラの夫になるという選択をすれば、たしかにそういう話になるかもしれない。

フローラは言う。

「あなたがわたしと結婚したくないなら、この国で貴族として生きられるようにしてあげる」

「いいんですか？」

話の流れから考えると、俺はかなり重要な存在のはずだ。

俺がフローラと結婚しないとすれば、フローラは困ったことになる。

けれど、フローラはうなずく。

「もともと身勝手な話だもの。いきなり呼び出して結婚してほしいなんてお願い、強制はできないよ」

「でも、フローラさんは『他の選択肢がない』と言っていましたね」

「うん。あなたが結婚してくれないと、わたしは困ったことになるの。大貴族と結婚したら、権力を奪われて、子供を産ませる道具みたいに扱われるかもしれない。外国の王子と結婚すれば、連れ去られて監禁されるかも」

「そ、そんな……」

男性優位の世界だと聞いてはいたが、予想以上だ。戦争の影響で皇帝家の力が弱いというのも、フローラの弱点なのだろう。

だとすれば、俺がフローラの夫を引き受ければ、俺も命の危険があるかもしれない。けれど、フローラの青い目に涙が溜まっているのを見て、そんな考えは吹き飛んだ。

「男の人たちは、わたしに子供を産ませることしか考えていないの。皇帝家の血を引いた、自分の子供が必要だから、わたしと結婚したいと思っているの。だからね……子供を産んだら、わたしは用済みだから、きつと殺されちゃう」

そして、フローラは俺にしがみつき、そして、震える華奢な皇女様は、俺を上目遣いに見つめた。

「あなたには……わたしを救ってほしいの。あなただけが、わたしと結婚して、わたしを妊娠させることで……わたしを救うことができるから」

自分よりずっと年下の少女に、涙目で「助けてほしい」と懇願されて、心を動かされない男はいないと思う。

相手が銀髪碧眼の美少女皇女様なら、なおさらだ。

しかも、「わたしを救えるのはあなただけ」とまで言われて、おまけに結婚して、妊娠させてほしいとも言われている。

華奢な震える身体を、俺はそつと抱きしめる。

そのすらりとした細身の身体は、とても温かった。

フローラは俺を見上げる。俺はその青い瞳を見つめ返した。

「本当に俺なんかでいいんですか？ 俺だって悪い男かもしれないですよ？」

「大丈夫。異世界の男の人たちは優しいって聞いているし……それに、さっきも言ったけど、あなたはきつと優しい人だってわかるから」

日本にだって、ろくでもない男は大勢いた。でも、俺は違うつもりだ。

目の前で震える少女を見捨てることはできない。

それに、この皇女と結婚して後宮生活を送れるというのも魅力的だった。

帝国が危険な状態になれば、俺の地位も怪しくなるが、それまでは俺は後宮で皇帝として生活できる。

しかも、何の義務も負わない。フローラにとっては、俺が政治はせずとも子作りさえ行ってくれば助かる、という話だった。

そして、もしフローラが危険な目に遭いそうなときは、何もしくなくていいと言われても、俺も力になるう。

俺は心を決めた。

「わかりました。フローラさんと結婚します」

フローラは、ぱつと顔を明るくした。

「わたしと子作りをしてくれるの？」

「そ、そういうことになりますか……」

あまりはつきりと言われると恥ずかしい。

腕の中のフローラは、いたずらっぽい笑みを浮かべると、俺に胸を密着させた。

その柔らかくて大きな感触に、俺はどきりとする。

「わたしのおっぱいから、あなたの子供に母乳をあげることになるんだよね？」

「気が早くないですか……？」

「きつとすぐだよ。あなたがわたしを妊娠させてくれるの、楽しみにしてる」

妊娠させる、というのは、そういうことをするということで。

俺は目の前の美少女をベッドの上で裸にするところを想像して、どきどきした。

フローラはご機嫌な表情でささやく。

「子供は何人がいいかな？ 跡継ぎの男の子は必要だけど、女の子もほしいよね！」

「フローラの娘なら、すごく可愛いでしょうね」

俺が思わずそう言うと、フローラはきょとんとした表情になり、それから顔を赤くした。

「も、もうっ。それって、わたしも可愛いと思ってるってこと？」

予想外にフローラが動揺しているのを見て、俺はちよつとからかってみたくなった。

「フローラさんが可愛いと思ったから結婚することにしたんです」

「ふ、ふうん……そうなんだ」

フローラは、言葉はそつけなかったけれど、満更まんさらでもなさそうに、頬を緩めている。

そして、フローラは俺の目を覗き込んだ。

「ね？ あなたはわたしの夫になるんだから、敬語はやめてほしいな」

「でも、フローラさんは皇女様ですし……」

「あなたは皇帝になるんだよ。わたしは皇帝であるあなたにご奉仕する妃きさきなんだから」

フローラはそう言っ、微笑んだ。

まあ、相手は年下の女の子だし。初対面とはいえ、フローラもこれだけくだけた言葉遣いな

んだから、俺もそれに合わせて悪いことはないだろう。

「わかったよ、フローラさん」

「さん付けもいらないよ？」

「ごめん。俺がその方が呼びやすいから」

「ふうん」

フローラは首をかしげた。

もちろん、いきなり呼び捨てに抵抗感があり、恥ずかしいのも事実だ。

だが、もう一つ俺には狙いがあった。

この世界は男性優位で、女性は見下されている。

皇女であるフローラですら、男たちは道具だとは思っていないという。

それなら——俺だけは、フローラと人間として接したい。一人の人間として尊重したい。

異世界人の俺がフローラにしてあげられるのは、それだけだ。

「さん」を付けているのは、俺がフローラという少女と対等だという象徴のつもりだ。

フローラがそんな俺の内心に気づいたかどうかはわからない。

けれど、フローラはふわりと微笑んだ。

「それなら、わたしもあなたのことを『カズキさん』って呼んでいい？」

「もちろんです。……じゃなかった。もちろん、かまわないよ」

「良かった。カズキさん……か。きれいな名前だよね」

「そうでもないと思うけど」

「そうだよ。だって……わたしの夫となる人の名前だもの」

そう言っ、フローラはとびきりの素敵な笑顔でうなずいた。

フローラは熱のこもった瞳で俺を見つめ、そして、ぼんと手を打った。

そして、密着した状態の俺から離れ、一步後ろに下がり、いたずらっぽく人差し指を立ててみせた。

「イチヤイチヤするまえに、これからのことを説明しないとね？」

「そうだね。俺は何をすればいい？」

「何もなくていいんだよ？」

フローラは微笑んだ。

そうだった。

俺は何かする義務を負わず、フローラの夫として子作りに専念すればいい。

政治はフローラ自身が行うのだろう。だが、形だけとはいえ、男の皇帝が必要なのだ。

それが俺だ。俺は存在するだけでフローラを救うことになる。

一方の俺は、何もせずにただだらのんびり暮らせばいい。

とはいえ、まったく何もなくていいということはないと思う。

「結婚式みたいなのではないの？」

「あ、カズキさん。結婚式したいんだ？ わたしも憧れなの。ウェディングドレスを着て、好きな人といつまでも一緒にいるのを誓うのつて、ロマンチックだよね」

どうやら、この世界も、地球と似たような結婚式の文化があるようだった。

でも、「好きな人」という部分だけは、俺では期待に応えられないな、と思う。

恋愛結婚の自由があれば、フローラみたいな可愛くて明るい少女なら、誰だって好きになっ

てくれただろう。

本当に好きな人と結婚することもできたかもしれない。

フローラは、そんな俺の内心に気づいたのか、優しく微笑んだ。

「これから好きになつていけばいいんだよ」

「……そうだね。そのとおりだ」

「それに、わたし、カズキさんのこと、きつと大好きになれる気がしているの」

フローラはふふつと楽しそうに、青い瞳を輝かせた。

そうなければいいのだけれど。

俺にとつても、フローラという少女のことは大事な存在となつていく気がする。

フローラは見た目がストライク直球で好みの美少女だし、それ以上に、そのまっすぐな明る

さが俺にはまぶしく、そして心地よく思えた。

フローラは言葉を続ける。

「結婚式はね、来週に行う予定」

「来週!? それはまたずいぶん……早いね」

「そうなの。普通だったたら、皇女の結婚式は招待客も多いし、準備に時間をかけないといけな

いんだけど……」

「急がないといけない理由があるんだ」

フローラは少し表情を暗くして、うつむいた。

そして、言いづらそうに、小声で言う。

「時間が経つとね、カズキさんが皇帝になるのを、貴族や他の国が反対するかもしれないから。その前に、話を進めてしまいたいのに」

「ああ、なるほど……」

「それに……そうしないと……わたしやわたしの妹をさらって……その……無理やり子供を作らせようって貴族もいるかもしれないし」

「え？」

「皇女と既成事実を作って、結婚してしまえば、自分が皇帝になれるって考える貴族もいるの。

実際、そうされたら……わたしは……」

フローラは消え入るような声になった。

そうなれば、打つ手がなくなるとのことなんだろう。

ここは現代日本ではなく、中世に近い世界だ。

フローラを手籠めにして妊娠させてしまえば、その子供が皇位継承権を持つ。

そして、無理やりフローラと結婚すれば、大貴族なら、その立場を利用して権力を握ることも可能なのだろう。

俺は戦慄した。

「……そんなことは絶対にさせない！」

俺が言うと、フローラはびくりしたように俺を見つめた。

そして、フローラはちよつと嬉しそうな顔をする。

「守ってくれるつもりなんだ？　ありがとう。でも、わたしにも親衛隊がいて、少なくともすぐに襲われたりはしないから、安心してほしいな」

裏を返せば、今後の状況の変化次第では、フローラが誘拐され、手籠めにされる可能性もあるということだ。

だからこそ結婚式を急ぐ必要がある。

「わたしを守ってくれるなら、いい方法があるの」

「それは？」

「わたしを妊娠させることだよ」

フローラはさりとそう言った。

たしかに俺が妊娠させてしまえば、他の貴族たちも「フローラをさらって、既成事実を作る」なんてことはできなくなる。

フローラは上目遣いに俺を見つめた。

そして、顔を耳まで赤くする。

「だからね、今ここでわたしを押し倒して……子供を作ってくれてもいいんだよ？」

「で、でもそれは……」

「ベッドもあるし。それに……さつきから、わたしのことをエッチな目で見ているよね？」

「え!？」

「胸とか脚とか……」

たしかにフローラのすらりとした身体は魅力的だった。チラチラ見ていたのを否定はできない。

整っているけれど、幼い顔立ちに比べて胸は大きくて、ドレスが胸の谷間を強調している。

そして、スカート部のスリットからは、白く細い脚が誘うように見えている。お尻も大きいし……。

俺は改めてフローラをじっくり見てしまい、フローラはその視線に気づいたのか、慌てて手で胸と下腹部を隠した。

「ほら、やつぱり見てる……!!」

「ご、ごめん」

「あ、謝らなくていいの。わたしを魅力的だっと思ってくれたってことだし……むしろ嬉しいなって思うの」

恥ずかしそうにフローラは言う。

そして、そつと俺に近づき、俺の胸に手を置いた。

「カズキさんはわたしのご主人さまなんだから……わたしのおっぱいも、お尻も……触り放題なんだよ?」

「さ、触り放題ってことはないんじゃないの?」

日本ではたとえ彼氏や夫であつたとしても、女性の胸や尻をいきなり触つたら、ビンタされ

ることもあると思う。

関係性によるとは思うけれど、触り放題ということとはなさそうだ。

でも、フローラは首を横に振った。

「わたしはカズキさんになら何をされてもいいよ? だから、わたしに早く子供を産ませてほしいな」

フローラのささやきは、あまりにも魅力的だった。今すぐ、後ろのベッドにフローラを押し倒しても誰も文句は言わないわけだ。

それでも、俺たちはまだ知り合つたばかりだ。

ためらっていると、フローラが突然、俺のズボン……その股間のあたりをそつと撫でた。

美少女の小さな手に触られて、どきりとする。

フローラは顔を赤くしながらも、ふふつと笑う。

「カズキさんのも……大きくなってる」

たしかにフローラの身体を見て、子作りをせがまれているうちに、俺は興奮してしまつていたようだった。

「ふ、フローラさん……やめてほしいな……」

「あつ、カズキさんつてば照れてる!」

くすくすとフローラは笑う。やめる気配はなくて、それどころか俺のズボンを脱がそうとする。

ただ、異世界の服だからか、構造がわからなくて、上手く行かないらしい。

俺はその隙にフローラを止めようとして……手がフローラの大きな胸の谷間に当たる。フローラは「あつ」と声を上げ、びくつと震えて目をつぶった。

俺は誘惑に負けて、フローラを押し倒しかけた。でも、ふとあることを思い出す。

「あの……フローラさん？」

「な、なに？」

「結婚式前に、その……子供を作るようなことをするのって、本来的には認められているの？」

フローラは、バツが悪そうに、えへへと笑みを浮かべた。

やつぱりだ。

おそらく教会の教えとかで、婚前の性交渉は禁止されているのだと思う。

それがどこまで厳密かはわからない。

ただの平民なら、破つてもいいようなルールなのかもしれない。

それに、大貴族がフローラを手籠めにするような場合、結婚の前だったとしても、権力で正当化できるのだろう。

でも、フローラは皇女で、俺には大貴族のような力はない。

というわけで、即位前から問題になりそうなことはしない方が良さそうだ。フローラが妊娠したとしても、生まれた子供の後継者としての正当性が疑問視されることもあるかもしれない。

俺がそう言うと、フローラは感心した様子だった。

「カズキさんって、頭の回転が速いんだね。それに慎重なんだ」

「そうでもないけどね。あと少しで、本当にフローラさんをベッドに押し倒すところだった」

「わたしが可愛いから？」

「そのとおり」

俺が苦笑してうなずくと、フローラはふふつと笑った。

「結婚式までお預けだね。でも、楽しみにしてる」

実のところ、俺にはもうひとつ引つかかる場所があった。

それはフローラの年齢だ。

俺がそれを尋ねると、フローラはくすつと笑う。

「女性に年齢を尋ねるのはマナー違反だよ」

「ご、ごめん」

「もうっ、冗談だよ。わたしは今月、十七歳になったばかりなの」

そのぐらいの年齢だとは思っていたけれど、やつぱりか。日本なら女子高生だ。

俺は二十六歳。九歳の歳の差だ。

そして、現代日本なら、フローラみたいな年齢の子に何かすれば、捕まってしまう。

いや、真剣な交際なら捕まるとは限らないけれど、そもそも大人と十代の少女の交際自体が

白い目で見られる。

俺が元いた世界の話をすると、フローラは驚いたように目を見開いた。

「カズキさんのいた世界って、変わってるね」

「そうかな」

「そうだよ。だって、十五歳とか十七歳の女の子って、もう身体は子供を産む準備ができてい
るし、一番子供を産むのにぴったりの身体でしよう？」

たしかにフローラの言うとおり、地球の現代医学でも、十代後半は妊娠適齢期なのだ。

社会がそれを許さないだけで、体のことだけで考えれば、一番良い時期であるとする言える。
フローラの話によれば、この国では結婚も十代後半から二十代前半のうちにするようだ。

「でも、抵抗感があって……」

「あんなにわたしの身体をエッチな目で見ていたのに？」

「それはそうなんだけど、倫理的に……」

俺が言いかけたとき、フローラが俺の唇を人差し指でふさいだ。

その柔らかい感覚に、俺はどきりとする。

唇に指をびたりとくつつけたまま、フローラはささやく。

「カズキさんの世界ではないけないことだったのかもしいけれど、この世界の倫理では、何も
問題がないことだよ？ それに、わたしの知ってるメイドの子は十三歳で結婚してお母さんにな
ったし」

そして、フローラはゆっくりと指を俺の唇から離した。

そして、その指をべろりと舐める。その仕草はあどけない子供のようでいながら妖艶で、俺
はどきりとさせられた。

「カズキさんの味がする……」

ドキドキする俺に、フローラが小さな赤い唇を俺の耳元に近づける。

「今度は、唇にちゃんとキスしたいな。でも、その前に……十七歳のわたしをちゃんと妊娠さ
せるって、約束してくれる？」

「……そうだね。わかったよ。それが……フローラさんを救う方法になるんだから」

「それに、カズキさんも、わたしとそういうことをしたいと思ってるんでしょ？」

その問いにカズキは素直にうなずいた。否定しても仕方がないからだ。

フローラは嬉しそうに笑うと、そつと唇をカズキの頬に触れさせた。

ちゅっ、と柔らかい唇の感触がする。指よりも、魅力的な不思議な感触だった。

フローラは柔らかく微笑んでいた。

「結婚式が待ち遠しいな。それが終われば……わたしは、カズキさんとエッチなことができる
んだものね？」

「フローラさんもエッチなことをしたいって思ってるんだ」

「うん」

フローラは恥ずかしそうにうなずいた。

俺はくすつと笑う。

「エッチなことなら、結婚式を待たずにもできるよ」

「え？ でも、結婚式の後に子供を作らないといけないって言ったのはカズキさんだよ？」

「子作り以外なら、いいんじゃないかな」

そして、俺は無防備なフローラを抱きしめ、そして少し強引に唇を重ねた。

さつきからフローラは俺に積極的にアプローチしてくれている。

俺も少しはお返しがしたい。

「あつ、んっ……」

フローラは甘くあえぎ、俺のキスを受け入れていた。

その小さな唇は甘い果実のような感触だった。

やがて俺がキスを終わると、フローラは顔を真っ赤にして、ぼーつとした表情で俺をぼんやり見つめていた。

俺は心配になって聞く。

「嫌だった？」

「うん。違うの……すごく気持ちよくて」

フローラは恥ずかしそうに、小声で言った。

そして、俺を期待するように見上げ、そして微笑んだ。

「胸を触ってもらったり、お尻を触ってもらったり、それに子供を作るのも……きつととても気持ちいいんだらうなって、想像しちゃった。……きやつ」

俺はたまらなくなつて、フローラの胸をドレスの上から撫でた。柔らかくて質感のある胸の感触が心地よい。

これが俺のものになるのか……。

「か、カズキさん……あつダメ……」

フローラが恥ずかしそうに声を上げる。俺はそのままフローラのドレスの上半身を脱がす。もともと肩の布地をずらしていたから簡単だった。

フローラの胸、その桜色の突起が露わになる。それはとても美しく清純で……そして淫らだった。

慌てて、フローラは両手で胸を隠す。けれど、俺が強引にフローラの手をどかしてしまう。

「いやっ」

「本当に嫌？」

「い、いやじゃないけど、びっくりしちゃって……あつ」

フローラの手がどけられ、俺の手がフローラのむき出しの乳房にふれる。

そのまま、俺はその胸の先端をきゅつきゅとつまんだ。

「ひやうっ……カズキさん……胸ばかりいじめないで……」

「じゃあ、お尻も……」

「あうっ……」

「フローラさんって安産体型だよな」

「うん。だから……カズキさんの子供、たくさん産むの。あつ……♡」
 フローラは俺に下腹部も撫で回され、嬌声を上げるだけの存在となった。
 こうして、俺は異世界で美少女と婚約して、子供を作る約束をした。

第一話 美人メイドと風呂場で子作り!?

一夜が明けた。

といつても、結婚式まで、皇女のフローラと子作りはできない。

あくまで、俺とフローラは婚約者ということになる。

今は、まだ。

王城の客室をあてがわれ、俺はそこで一人で眠ったのだ。

窓からの朝日で、俺は目を覚ます。豪華な天蓋付きベッドはふかふかで寝心地も良かった。

フローラは俺に何もしなくていいと言った。

そして、俺に何もできることはない。元の世界に戻ることもできない。

まあ、ゆつくりすることにしよう。

ブラック企業に勤めていて、過労で死にそうだったのだから、今は二度寝をしても悪いことはないはずだ。

そう思ったとき、部屋がノックされた。どうぞと返事をする、一人のメイドの女性が部屋に入ってきた。

まだ若い女性だ。

フローラと年齢はそれほど変わらないんだと思う。

淡い茶色の髪と、灰色の瞳が印象的な女の子だ。

明るく華やかなフローラとは対象的な、クールで落ち着いた雰囲気の良い女性だった。

ただし、フローラよりもさらにスタイル抜群で、メイド服の上からでも、胸はメロンのように大きく、お尻ははち切れそうなほどの存在感があった。

彼女は大きな胸に手を置くと、うやうやしく一礼した。大きな胸がたぶん揺れて、俺はついちらりと見てしまった。

一瞬だけだから、気づかれてはいないと思うけれど……。

「初めてお目にかかります。私はアイリスと申します」

「は、はじめまして……」

「カズキ様の専属メイドを拝命しました。これから、カズキ様のあらゆることをお世話しますので、何でもご命令ください」

「ありがとうございます。よろしく願います、アイリスさん」

アイリスは整った顔に笑みを浮かべる。

「私はメイドですので、敬語は不要です。アイリスとお呼びください」

「あー、たしかに。そうだね、アイリス」

この世界は身分制社会であり、これから俺は皇女の夫として、皇帝となる。

つい日本の感覚で話してしまったが、皇帝がメイドに敬語を使うのは、まずいだろう。アイリスも困るに違いない。

「お風呂のご用意ができております」

「ああ、そうか。二度寝しようと思っていたけど、この世界では朝風呂の慣習があるんだ……」

身を清めて、皇帝としての服装に着替える、みたいな儀式があるのだろう。

俺の言葉に、アイリスが頬を緩める。

「もちろん、カズキ様が二度寝をしたいということであれば、そうしていただいて問題ございません」

「いいの？」

「はい。カズキ様に『何もしないで、好きなようにしていいよ』と約束したのは、フローラ殿下自身です。そうであるならば、全力でカズキ様の望むとおりにするのが、メイドの私の務めです」

「なるほどね、ありがとうございます。でも、せっかく用意してくれたから、お風呂には入ることにするよ」

他人が用意した朝風呂に入るなんて、最高の贅沢だ。

俺はいそいそと風呂に向かった。

王城の大浴場の他に、客室付きの専用浴場も隣に設置されているらしい。

さすが皇帝の城だ、と俺は感動する。

服を脱いで風呂に入ると、そこは大理石の豪華な浴場だった。浴槽にはたっぷりとお湯が張

られている。

さらに印象的だったのは、日本の風呂場と同様のシャワーのようなものがあつたことだ。どうやら魔法で動いているようだが、便利なものだと思う。

俺がシャワーを使つて体を流しはじめたとき、風呂場の扉が開いた。

「失礼いたします」

そこにいたのは、メイドのアイリスだった。ただし、メイド服を着ていない……！身にとつてゐるのは、バスタオル一枚だけで、ほとんど裸だ。

俺は慌てた。こっちはまったくの裸なのに。

「あ、アイリスさん。どうしたの？」

俺の疑問に、アイリスは首をかしげた。

「お背中を流しに来たのですが……」

「いやっ、でも、知り合つたばかりの男に普通はそんなことはしないというか……」

「私はあらゆる面でカズキ様にご奉仕するように、フローラ殿下からご命令をいただいています」

「で、でも……」

「私は命令を遂行できないと、フローラ殿下に怒られてしまいますね」

わざとらしく、困つたようにアイリスは言う。

俺は仕方なくうなずいた。

ここで俺が拒絶すれば、アイリスの立場は困つたものになるのかもしれない。

俺は椅子に座り、アイリスが俺の後ろに立つ。そして……俺の背中に柔らかなものが当たつた。

この質感は……アイリスが胸を俺に押し当てている……！

「あ、アイリス!？」

「あら、このような方法で洗つて差し上げると、殿方は喜ぶと聞いていたのですが」

「正しいけれど、間違っている……」

アイリスはボディソープ、あるいはそれに近い油状のものを胸につけているようだった。バスタオルも脱いでいるのだろう。

アイリスが胸を上下させると、俺の背中とこすれ、ぬるぬるとした感触がする。

「あっ、んんっ……」

アイリスの熱い吐息が俺の耳元をくすぐつた。

背中での柔らかなさを感じながら、俺は頬が熱くなるのを感じた。

いくらなんでも止めないといけない。

「アイリス……お、俺が困るから、やめてくれない？」

「お困りになるのですか？ あんなに私の胸を興味深そうに見ていたのに？」

最初にチラ見したことは、バレていたらしい。

だが、そういう問題ではない。

「お、俺も男だし……こんなことされたら、襲ってしまいそうになるよ」
 「襲ってくださったって問題ございませんよ」

「え？」

「むしろ、私はそのためにここにいるのですから。カズキ様のあらゆるお世話をするのが私の務めです。もちろん性欲処理も」

相変わらず、アイリスは胸を動かして、俺の背中を洗っていた。互いの体がこすれるたびに、アイリスが「ああっ」と甘い声を上げる。

俺はどきどきしながら、尋ねる。

「すべてのお世話について、その……性欲処理なんて、メイドの仕事ではないと思うけど……」

俺の言葉に、アイリスはびたりと動きを止めた。胸の柔らかな感触が俺の背中から離れる。ほつとすると同時に、少し残念な気がする。

だが、今度は、アイリスは俺の正面に回り込んだ。両手で胸と下腹部は隠しているが、扇情的なことに変わりはない。

大きな胸が両手からこぼれそうになっている。

アイリスは俺の前にひざまずき、俺を見上げた。

「カズキ様はこの世界の人間ではないのでしたね。殿方の専属メイドといえば、この世界では、妾めかけのことを指します」

妾。つまり、正式な妻以外の愛人のことだ。

そういうことだったのか。

俺は天を仰いだ。

アイリスはささやく。

「フロラ殿下との婚姻まで時間があります。そのあいだの欲求不満は、私を使って解消してくださいればよろしいです」

「使うだなんて、そんな……道具みたいなことはしないよ」

「あなたは皇帝陛下になる方です。私のようなメイドなんて、たとえ殺しても何の罪にも問われないのですよ？ 私を犯して孕ませたところで誰も問題視しません」

「仮にそうだとすると、俺の世界の倫理では許されないよ」

「でも、この世界では許されます」

「俺にはフロラさんという妻がいるんだ。浮気みたいなことはできない」

「妾は妻ではありません。カズキ様にとつては、私はただの奉仕者です。フロラ殿下と私の身分が違う以上、浮気も不倫も成立しません」

「だとしても、フロラさんがどう思うか……」

「そのフロラ様のご命令なのです」

そうだとは思っていた。

専属メイドを任命したのはフロラだろうし、そして、フロラもアイリスを俺の妾とする

つもりで送り込んできたのだろう。

だが、何のために？

「フローラ殿下は、カズキ様がなるべく快適に過ごせるようにお考えなのです。そして、この世界では妾の存在は当たり前ですし、皇帝とあれば、数十人の側室と数百人の妾を持つているものです」

どうやら、側室と妾は区別されるらしい。おそらく側室は正妻ではないけれど、妾としての地位を持つている。出身も貴族の令嬢なのかもしれない。

一方で、妾はそれよりも低い地位だと推測できる。おそらくメイドのアイリスのような庶民の女性で、男性優位の社会では性欲処理の道具として扱われるのだろう。

だが、そんなことはさておき、俺の心は決まっている。

「俺は一夫一妻の国で育ったから、側室も妾もいらないよ」

「あら、殿方といえば、世の中の美女・美少女はみんな抱いて孕ませたいと思っているとばかり思っていました」

「まあ、そういう気持ちがあることは否定しないよ」

「なら、遠慮せず私を抱いてしまえばいいではありませんか。ちなみに私は処女で十九歳です。自分で言うのも変ですが、容姿も魅力的だと思うのですが……」

そう言つて、アイリスは首をかしげ、そして、大きな胸を隠していた手をどける。俺は慌てて視線をそらす、アイリスはその乳房を正面から俺の胸板へとくつつけた。

そして、微笑む。

「私ではご不満ですか？」

「そういう話ではないけど、アイリスは嫌じゃないの？ いくらフローラさんの命令だからって、出会ったばかりの男に、しかも妾として奉仕するなんて……」

俺の言葉に、アイリスはあつげにとられた様子だった。

そして、俺に胸をくつつけたまま、自分の身体に目を落とす。

「メイドなんかの気持ちを思いやるなんて、変わった方ですね。フローラ殿下が気に入られたのも、そういうところなのでしょう」

「フローラさんが俺を気に入った？」

「はい。優しくてかつこよい人で良かったって、大層お喜びでした」

そう言うとき、アイリスの表情が少し緩んだことに気づいた。

俺はアイリスに聞いてみる。

「フローラさんには昔から仕えているの？」

「はい。殿下が子供の頃からお世話をしておりました。……私の幸せは、フローラ殿下の幸せと言つても過言ではありません」

そう言うアイリスの表情は優しく、本当に幸せそうだった。

そんな昔から仕えてくれているメイドを、どうしてフローラは俺の専属メイドにしようとしたのだろうか？

「皇帝であるカズキ様は、いずれは側室や妾を持たないわけにはいきません。子孫を残すのは皇帝の義務ですから。フローラ殿下が、私を選んだのは、同じ夫を持つ最初の女性は、信頼できる相手が良いと仰つてくださったのです」

「それで、アイリスを選んだわけか」

「ようやく納得できた。そういえば、フローラもさりとて側室の女の子とも子作りをしてね、と言っていた気がする。」

ただ、アイリスはメイドとはいえ、フローラにとつて大事な人間らしい。なら、なおのこと、俺がこの場で手籠めにしたりするわけにはいかない。

「フローラさんやアイリスの気持ちは嬉しいよ。でも、今はまだ、側室や妾は本当にいらないんだよ」

「ですが……」

「フローラさんは、俺の好きなようにしていいと言ってくれた。もちろん皇帝の義務だつてことはわかってはいるけれど、俺にはフローラさん一人で精一杯だし、あんな可愛い子がいるなら、それで十分なんだよ」

「で、でも、もし何もしなければ、私はフローラ殿下から叱られてしまいます」

はじめて、アイリスは動揺した表情を見せた。

俺に性的奉仕をするために来たのに、何もなかったでは、アイリスも困ってしまうということらしい。

アイリスは言う。

「知つての通り、この世界は男性優位の社会です。それは……先の戦争で男が大勢死に、男女比が大きく変化したことも理由なのです」

「へえ。そんなに人口差があるの？」

「男性は十人に一人です。つまり一夫一妻だとすれば、女性が九人いれば、八人は夫がいないということになります」

俺は驚いた。皇帝や異世界人という以前に男であるというだけでも希少な存在らしい。

アイリスは涙目になり、顔を赤くしていた。

冷静でクールだった彼女が、必死な表情で俺を見つめる。

「殿方に抱かれることはとても貴重な機会なんです。お相手が皇帝陛下となればなおさらです。私がカズキ様の子供を妊娠すれば、ずっとフローラ様のお側でお仕えすることができます。ですから……一度でいいですから、私を抱いてくださいませんか」

アイリスは必死で俺に頼み込む。

なんだか俺が悪いことをしている気分になってくる。

いや、実際にそうなのか。

この世界の価値観でいえば、俺がアイリスを抱かないのは悪だ。

フローラもアイリスもみんなが困ってしまう。そして、アイリスを抱くことに何のデメリットもない。

あとは俺の気持ちだけだ。

そして、目の前に裸の美女がいて、邪な思よこしまいを抱かないといえば、嘘になる。

俺は立ち上がり、アイリスからそつと離れた。

アイリスは拒絶されたと思ったのか、悲しそうな表情を浮かべる。

だが、次の瞬間、俺の手はアイリスの腕をつかんでいた。そのまま強引に胸を隠す手をどける。

アイリスは「あつ」と声を上げる。アイリスの美しい胸は俺の目の前にさらされていた。桜色の突起が目眩しい。

そのまま俺はアイリスの胸を揉みしだく。

「えつ、ひゃうつ……あつ」

アイリスが甲高い可愛らしい声を上げた。俺の行動は予想外だったらしい。

俺は気にせずアイリスの胸を弄んだ。

「何をされてもいいんじゃないかったの？」

「そうですね……突然だったので……あうつ。や、やつぱり、私のことをエッチな目で見ていたんですね？ きゃあつ」

「男はみんな、けだものなんだよ。アイリスみたいな可愛い女の子を見たら、エッチなことをしたくなるに決まってる」

「か、可愛いですか……？ 私が？」

「そうそう」

俺の言葉に、アイリスはうろたえたように、かあつと顔を赤くしている。

最初のクールな面影はどこにもなく、一人の女の子になっていた。

俺はアイリスにささやく。

「アイリスは俺なんかでいいの？」

「き、決まっています。だって……フローラ殿下が好きになられた方ですから。フローラ殿下が好きな方は、私も好きなんです」

そう言っ、アイリスは嬉しそうに微笑んだ。

俺は覚悟を決めた。

アイリスの唇を強引に奪う。

抵抗せずにアイリスも受け入れていた。舌を絡めると、アイリスも舌を絡め返す。

「ちゅぷつ。あつ……んんっ」

俺の舌がアイリスの舌を蹂躪する。

アイリスがびくんと身体を跳ねさせ、そして大きな胸が揺れた。

やがてキスを終えると、俺とアイリスの唇から唾液の糸が引く。

うつとりとした表情でアイリスは、ぺたんとその場に座り込んだ。

ちょうど目の前に、俺のペニスがある状態になる。

「か、カズキ様の……すごく大きくなってる……。これが私の……」



「アイリスの中に入るんだよ」

「そ、そんな無理です……あつ」

俺がアイリスの胸をさわさわと触ると、アイリスが甘くあえぐ。

「なら、まずは舌で舐めてみる？」

「わ、わかりました……ご奉仕します」

アイリスは涙目で、たどたどしい舌使いで俺のものをぺろぺろと舐め始める。手でも俺の肉棒を刺激し始めた。

さっきまでの強気な様子は消え、男のものに恐怖と期待を覚える処女がそこにはいた。

アイリスのおかげで、ますます俺のペニスは大きくなっていく。びくびくと震えるそれを、アイリスは優しく包み込む。

「ちゅぷ……れろっ……気持ちいいですか？」

「見ればわかるんじゃない？」

俺の言葉にアイリスは顔を赤くした。俺のものがアイリスの愛撫で怒張しているのは明らかだったからだ。

しばらくして俺のものが限界まで大きくなり、そのまま暴発した。アイリスのきれいな顔に、白い欲望の証を撒き散らす。

アイリスは白濁液まみれになり、呆然とした様子だった。指で顔の精液をすくい、ぺろりと舐める。

「これが……カズキ様の味……」

「いきなり顔にかけてごめん」

「いえ、とんでもございません！　むしろ貴重な子種^{こだね}をいただいてしまい、畏れ多いです。でも……これでは今日は子作りできませんね」

アイリスはほっとしたような、残念なような複雑な表情を浮かべた。

俺はくすりと笑う。

「そうともかぎらないさ」

「えっ？　あつ、いやあつ」

俺はアイリスの肩に手を置き、強引に床に押し倒した。

たわわな胸が揺れる。

アイリスがうろたえた表情をした。

「待ってください！　さっきしたばかりだから、男の人のお○んちんは小さくなっているはず……」

そこまで言って、アイリスは絶句したようだった。なぜなら、俺のものはもう再び大きくなっていたからだ。

「望み通り、子作りしてあげるよ」

「で、でも、心の準備が……あああああああつ」

待て、と言われても、俺はもう我慢ができなかった。誘ったのはアイリスの方だ。俺は強引

に襲いかかろうとするが、アイリスは身体を起こすと、四つん這いで背を向けて逃げ出した。

そこを俺は背後から捕まえる。というか胸を鷲掴み^{わしづかみ}する形になった。

「ひんっ！　あつ、ああああんっ」

暴力的なほど大きな胸を俺は好き放題にまさぐる。俺がその桜色の突起をきゅつきゅつとつまむと、アイリスは「あつー！」と甘くあえいだ。

「ダメですっ！　ダメええええええつ」

俺は大きくなったペニスを背後からアイリスの秘所にこすりつける。性器と性器がこすれて、アイリスは「ひやうんっ!？」と嬌声を上げた。

「か、カズキ様のものが当たってる……!」

「次はこれがアイリスの中に入るんだよ」

「それは……」

「本当に嫌ならやめるけど？」

俺の言葉に、アイリスは「瞬黙り、それから「子作り……してください」と小声で言った。

「それが私の役目ですから」

「無理をしなくてもいいよ。明日にしてもいい」

「無理なんかじゃありません！　これは私の望みで……あつ、あああああ!？　は、入ってくる

……いたあああああいつ♡」

アイリスの返事の途中で俺は我慢できなくなりました。俺のペニスがアイリスの秘所を

貫く。

「やつ、ああああああつ♡ ひうつ♡」

アイリスは俺に蹂躪されるままになっていた。ずんと奥を突かれ、アイリスはびくんと身体を跳ねさせる。その拍子にメロンのように大きな胸がまるで晩鐘ばんねのように揺れた。俺はその大きな胸もふたたび手に収め、乱暴に揉みしだきながら、アイリスを何度も突く。

あえぎもだえるアイリスは、小さな声で尋ねる。

「わ、私の身体は……いかがですか？」

「とても気持ち良いよ」

「良かった……あつ、ん……奥、深いっ♡ ……あああああんっ♡」

俺のものが一段と大きくなる。それと同時に、アイリスも意図してか、無意識にか、自分から腰を振り始める。

そろそろ限界だ。このままだとアイリスの中に出してしまう。抜こうかと思っただけで、アイリスがそれを止める。

「抜いちやダメですっ！」

「でも……妊娠しちゃうかもしれないよ？」

「あんっ、あああああんっ♡ いいんですっ、私はカズキ様の妾、性欲処理メイドなんですから……カズキ様のしたいようにしてくださいっ♡ あああああんっ♡ ダメっ、気持ち良すぎてっ……♡」

俺にガンガンと遠慮なく子宮を突かれ、肌を朱色に染めたアイリスは、ただ快楽に歓喜の声を上げるだけの存在になっていた。

「それに……私はカズキ様の赤ちゃんが好きですからっ。あつ……♡」

「本当にいいの？」

「はいっ！ 私を孕ませてください！ 熱くて白いのをいつぱい、私のメイドお○んに注いでくださいっ♡」

アイリスが懇願するように言う。

俺が限界に達したのもほぼ同時だった。俺のペニスがアイリスのなかに白い欲望の証をべつとりと撒き散らかす。アイリスは「カズキ様の……いつぱい……♡」と歓喜の声を上げて、それを受け入れていた。

しばらくして事が終わると、アイリスはぐったりとした様子で、裸の身体をうつ伏せに横たえていた。

「終わった……のですね」

そう。そのはずだった。ところが、俺のものはまったく衰えた様子がなかった。

一度はアイリスに顔射し、二度目はアイリスの子宮に注いだ直後だというのに、異世界に転移したせいだろうか。

俺はアイリスの華奢な身体を抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこだ。

「きゃつ。か、カズキ様……?」

アイリスが可愛らしい声を上げる。

俺はそのまま浴室を出て、アイリスを寝室へと連れ出す。そして、ベッドに投げ出してその上に馬乗りになった。

「か、カズキ様……も、もしかして」

「アイリスが可愛くて我慢できなくて」

「か、可愛い……。さっき、子作りのときの私も可愛かったですか?」

「もちろん。二回目嫌?」

「い、いえ! そんなことありません! 私の役目はカズキ様の子をなすことですし……それにカズキ様に、また可愛いと言っていたみたいですから」

アイリスがふふつと微笑むのと同時に、俺はアイリスのお尻を触り、アイリスが「きゃつ。もうカズキ様……」と頬を膨らませる。

そして、そのまま俺はアイリスに覆いかぶさる。

「顔が見えると……恥ずかしいですね」

「バックからの方が良い?」

アイリスは首を横に振った。

「この方が子作りしているんだって実感できますから。あつ、ちゅぷつ……♡」

俺とアイリスはふたたび情熱的なキスをした。その後、俺はアイリスを何度も何度も抱いてし

まった。気が付いたときには、アイリスは気を失い、そのスタイル抜群の身体を白濁液まみれにして投げ出していた。

でも、そんなアイリスの表情は……幸せそうに笑みを浮かべている。

俺はこの身体をこれからも好き放題にできるのだ。

俺はアイリスが愛おしくなってそつと髪を撫で、キスをした。

こうして、俺に専属メイドができた。